

病床閑日

東條耿一

私はけふ 晝のひと時を

庭の芝生に下りてみた

陽はさんさんとそゞぎ 近くの樹立に松蝉が鳴いてゐた

私は緑のやは草を踏みながら

踏みながらそのやはらかな感觸を愛しんだ

不思議なほど 妖しいほど 私の心にときめくもの

一体この驚きは何だらう

思へ寝台の上にはやも幾旬――

もうふたたび踏むことはあるまいと思つてゐた

この草 この緑 この大地

私の心は生まれたばかりの仔羊のやうに新しい耳を立てる

新しい眼を瞪る そうして私は

私の心に流れ入る一つの聲をはつきり聞いた

それは私を超え 自然を超えた

暖いもの 美しいもの

ああそれは私のいのち いのちの歌

昭和十七年 「山桜」 七月号